

花袋君の作と生き方（一）

柳 田 国 男

昨晩も旧友たちの寄合の席で君は田山君のどの作が一番に、頭に残って居ますかと島崎氏からきかれたが、私はやはり『重右衛門の最期』と答えざるを得なかった。花袋晩年の諸篇の中には、無論あれ以上の深みを持ち、又遙かに痛切に、時代に呼びかけた作品もあるのであるが、これは自分たちの感銘力とも名づくべきものが、既に弱って居るのだから致し方が無い。少なくともこの重右衛門の如く、私を驚嘆せしめたものは後にも先にもなかった。花袋を有名ならしめた中期のもっとも油の乗った幾つかの作品に対しては、私は必ずしも雷同しなかったのみならず、寧ろ内心の不満を隠すのに骨が折れた。殊に『蒲団』に至っては、末にはその批評を読むのさえいやであった。それを当人もよく知って居て、時々議論をしようとするが、いつでも私が説き方の拙なるを自覚して、旗を巻いて退却するのが落ちであった。

論客としては中々強豪なる田山君であったが同時に自身をも完全に説き伏せる力を持って居た。彼が極端に想像を排撃し、個々の文芸の目的計画を否認し、後には題材の選択をすら無用視せんとしたのは、実は自己従来の状態の改革でもあった。単に機会を見つけて持ち前の信念を表白しただけでなかったことは、彼が前期の作品を読んだ

者の、認めずにはいられぬことであった。私はあの頃から人の一生が、杉の木などの一本調子よりも、梅や松みたいに枝から枝をさして、段のちがった樹ぶりになって行くのを、得用だと思ふような男であった上に、特に田山君においては色々の『次の境界』が予期せられた故に、いつも気ぜわしくなくその変化ある成長を念じたのであった。決して成功ばかりはして居ないが、常に脱出を企てて居る島崎君のような人もいる。君も出て来い出て来いと、実は何回となく無益なそそのかしを試みたのは私であった。田山君はその氣質として、無論必ず重い返事をした。それが追々に強く拒み、苦く不機嫌な顔を背けるようになって、私は時代が人を約束する力の、隠れて甚だ猛烈なることを感じたのであった。田山君は結局自分が築城した自然主義の山頂に立て籠もって、やや久しく平原のあらしを目送して居なければならなかった。そうして今回はまだ人間の活き方が、そう幾通りもあるものでも無いということを、しみじみと私たちに実験させてくれたのであった。

何だ今頃、そればかりの実験に感動する者があるか、といつてもよい様なものだが、これが今日になるまで自然主義そのものの、主要なる論点の一つでもあった。私も既にそれにかぶれて居るのである。田山君などはこれを自分の実験と自分で無い人の実験とに差別したのみならず、更に前者の中でも求めて得た実験と、直ぐ前ので無いものとを取除けようとしたことさえあった。記

述を出来る限り物の真髄に接近せしめるためには、これが安全なる方法と認めたことも事実であるが、それよりも強い理由は現代にみなぎる記録の不信用、即ちそういう実験をしたかどうかは疑われないとしても、果たしてその事実を我々に用立つように、又は自分が獲得したのと同じ程度に、精確かつ有効に伝達してあるか否かが、甚だ寛束ないからであった。実際そうで無い証拠は多々であり、原因もまた大よそは指摘し得られた。だから文芸はまず個々の実験者が、各自の分担した部分をありのままに報告してくれる様に、改造せられる必要があったわけで、それが協力して新たな人生観を組立てるというまでは、あるいはまだ意識せられて居なかったかも知れぬが、兎に角に自然主義運動の、自然の論理はそこへ行かねばならなかった。そうして今では既に予期以上の承認を受けて居ると私は思う。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所や補訂を加えた箇所もある。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より